

高校における「宗教文化と道徳の知識」等の科目がそれである。宗教(イスラーム)教育という面で見ると、他に、国民教育省管轄のイマーム・ハティプ校と宗務庁管轄のコーラン・コース等がある。

国民教育省の普通教育を中心とする。その中で宗教教育を司る部局は国民教育省宗教教育総局(Millî Eğitim Bakanlığı Din Öğretimi Genel Müdürlüğü)である。その部長の見解からアレヴィーについての認識(二〇一二年八月二三日インタビューの一部)を示す。まず、アレヴィーは宗教 Din である。それもハジ・ベクタシ・ヴェリに連なる一分派(Kol)である。従って、アレヴィー・ベクタシということになる。ハジ・ベクタシ・ヴェリに関する『マカラート』などがその思想の中心となる。また普通学校における宗教教育は、それ以外の「宗教」の人が授業を受けることは拒否できる。例えばキリスト教徒やユダヤ教徒や「アテイスト(Ateist 無神論者)」などの生徒は、その授業に代わり、「メディア」「手工芸」などの授業でその単位を代替できる。「以下省略」つまりアレヴィーはベクタシの一分派、従ってイスラームの中に属す。つまりムスリムであるので、「宗教文化と道徳の知識」などの科目を、ムスリムと一緒に授業を受けなければならないという見解である。アレヴィーは他の宗教であるという理由で代替授業は不可能となる。この見解である、これまでムスリム(それもスンニー派)との違いを主張してきた多数のアレヴィーは強烈なストレスを感じることになる。他の科目を受けるためには「アテイスト」とならざるをえず、かつてのアレヴィー⇨アテイスト⇨社会主

義者・共産主義者⇨反政府的傾向という図式の中に投げ込まれることになる。このように一九九〇年代に「アレヴィーとは何か」と関心を持たれ、自らを中央アジアに結びつけることもあり、またイスラームの内か外か等様々な議論があったにも関わらず、この二十年で政府主導あるいはそれに準ずる形でアレヴィーの「見解」がつくられてきたことも観察できる。宗教教育の認識の仕方はアレヴィー内部の軋轢、亀裂を深くすることも考えられる。(アレヴィーにとって自己認識の不明瞭さは多くの議論を生み、それはドイツ等海外のトルコ系移民にとって、単なる自己認識、ルーツ探索にとどまらず、死活問題、生存戦略でもあった。)彼らにとつてこの教科書、宗教教育は深い亀裂を生む可能性を孕みつつ、イスラームの影響が見られることから、イスラーム(スンニー派)への同化の可能性をも含んでいるのである。

ドイツにおける宗教科の歴史

——「他者」とのかかわりを読む——

石川 智子

現代社会の特徴として多元化やグローバル化が指摘されるようになって久しいが、そうした社会にあつて、「他者」の問題は新たな切実さを帯びることになる。宗教が関わる領域においても「他者」の問題はさまざまなレベルでその姿を見せる。諸宗教の「対話」や「共生」が時代の価値として喧伝される一方で、宗教間の「衝突」が指摘され、宗教への「嫌悪」が公に語られる。こうした状況の中で必要なのは、「対話」にせよ「嫌

悪」にせよ、その対象となる相手——「他者」——がどのように表象されているのかを、「対話」からも「嫌悪」からもいったん距離を置いたところで、考えてみることはないか。

宗教の領域での「他者」の問題を公立学校の宗教科という場から考えていく理由は、伝統的に社会の中で宗教教育を担ってきた家庭や教会といった場がその機能を弱めているなか、学校が宗教に関わる伝達の間としての重要性を相対的に増していることにある。特に公立学校における宗教科は、宗教科に関わる宗教団体のみならず、他の政治組織の思惑も反映されていることが予測されるのであり、多元化や個人化が特徴とされる社会のなかで、異なる関心や要求を持つ個人および集団が宗教的なテーマについてコミュニケーションする数少ない場のひとつに数えられる。ここでは公立学校における宗教科が存在するドイツを考察の対象として選択し、歴史的な分析を行っていく。まずその最初期からキリスト教と深く関わるドイツの学校の歴史を概観し、実際の宗教科の指導要領を分析する。

宗教改革以前にドイツではいくつかの種類の学校が存在していた。まず登場したのは修道院学校と司教座教会付属の学校で、カール大帝の「一般訓令」発布後に帝国内に広まった。また都市の有力者によってラテン語学校やドイツ語の読み書き学校などが作られたが、いずれの場合も教会の学校経営を妨げないことが重要だった。宗教改革後、多くの修道院学校や司教座教会付属学校が廃止された。その一方で新たに、教会の雑務を行う「キュスター」が運営するキュスター学校、君主が直接設立した学校などが誕生した。一七、一八世紀には、敬虔主義者

と合理主義者がそれぞれに宗教教育の改革や学習内容および方法の改善に着手した。一九世紀になると宗派混成学校が登場したが、教会からの反発が強く、発展はごく緩やかなものであった。またこの時代には、ユダヤ教の公立学校が始めて登場し、ユダヤ教の宗教科および指導要領が作成された。ヴァイマル憲法は従来とは異なつて宗派混成学校を通常の学校類型とし、従来の宗派学校は申請によって設置されるものとした。この頃には、宗派混成学校と宗派学校の割合の地域差が明確になり、バーデンやヘッセンでは宗派混成学校が多く、プロイセンの大部分とバイエルンでは宗派学校が標準的な類型となった。第二次世界大戦期には国家社会主義による反宗派学校のキャンペーンが行われ、代わつて「共同体学校（ドイツ学校）」の設置が促進された。また多くの私立学校が廃止される一方で、国家社会主義に基づく私立学校が設置された。戦後、学校制度を戦争以前の状態に戻そうという傾向があり、宗派学校も一時的に復活するが、一九六〇代後半にはほとんどの連邦州で廃止された。

一九七〇年代、一九九〇年代、二〇〇〇年代のバイエルン州の各宗教科指導要領における他宗派・他宗教の分析からは、「世界宗教」という概念が、イスラームとヒンドゥー教・仏教という二つの独立したテーマへと分岐していき、各宗教の教義や概念などから生徒たちの現実のなかでの各宗教とのかかわりが強調されていること、心靈主義やオカルティズム、新宗教運動やセクトなどの諸潮流についての項目が、より大きくかつ具体的に扱われるようになっていくことなどを読み取ることができる。